

「皮肉な違和感」

マタイの福音書2：1－16

December.20.2020

マタイの福音書2：1－16

Preface

主イエス様の誕生の様子を記録した有名な聖書箇所ですが、よく読んでいきますと、違和感を覚えます。

どんな違和感なのかと言いますと、皮肉な違和感です。

じゃ、どんな皮肉なのか？

力のある者が、力の無い者に勝っていないという皮肉です。

そして、力のある者に平安がなく、むしろ、力の無い者に平安があるという皮肉です。

そればかりか、力のある者が、取るに足りないほど無力で小さな者を、これ以上ない程に恐れていることに違和感を覚えます。

普通ならば、無力な者が、力ある者に恐れを抱いて然るべきなのに、むしろ、力のある者が、無力な者を恐れていることに違和感を覚えます。

その恐れと言ったら、人の道から外れるほどの残虐な行いを実行してしまうほどの恐れです。

果たして、そこまで恐れる必要があるのかという程の恐れを抱いていることに、得も言わぬ違和感を覚えます。

東方の博士たちが、空に輝く星に導かれて、お生まれになった救い主イエス様に出会い、黄金、乳香、没薬を献げたという喜びの話には、一切の違和感を覚えません。

むしろ、至って自然ですし、引っかかるものは何もありません。

そしてもし、この東方の博士たちとイエス様の出会いだけで、話が終わっていれば、めでたしめでたし、ハッピーエンドとなるのですが、今日の聖書箇所はそのように終わっていません。

逆に、もしハッピーエンドで終われるようならば、キリストが誕生しなければならない理由なんてありません。

ハッピーエンドで終われない世界、ハッピーエンドで終われない人間社会、ハッピーエンドで終われない人間たち、ハッピーエンドで終われない罪な、そして

皮肉な違和感を感じる世の中だからこそ、

神であられる方が、その御姿をお捨てになって、この罪なる世界の真っ只中に、お生まれなさったわけです。

Part One

マタイの福音書2章で、皮肉な違和感を与えていた張本人こそヘロデ王です。

羨望の眼差しで見られる権力を手にしているいっぱいの王が、弱くて弱くてたまらない程に全く無力なお姿でお生まれになった赤ん坊のイエス様を、有り得ない程に恐れます。

王であるヘロデに対抗し得るものなんか何一つ持たない赤ん坊のイエス様を、とてつもなく恐れました。

どれほどに恐れたかと言いますと、ベツレヘム一帯の2歳以下の男の子を皆殺させるほどに恐れました。

自分の持っている力をすべて動員して、なりふり構わず、恐れの根源だと思い込んでいるものを取り除こうとしました。

人は恐れると、持っている力すべてを利用して、その恐れを取り除くことに無我夢中になり、恐れを取り除くことが第一になり、「人を傷つけても構わない、自分の恐れが取り除かれるならば！」と、あたりかまわず、とっさに持っている力すべてを動員して恐れを取り除こうとします。

これこそ、人の弱さです。

弱いから恐れ、恐れるから力を蓄えようとします。

そして、その蓄えた力を、恐れを取り除くために用いようと、さらに日々貯めこもうとします。

そしていざとなったら、その恐れを除去するために、持っている力を発揮して、時には冷静に、また時にはなりふりかまわず、その力をもって、人のみならず、物や自然さえも傷つけます。

傷つけた事実さえも、貯めこんだ力をもってねじ伏せようとします。

もし、ねじ伏せる力がないならば、ねじ伏せることの出来る力を貯めこもうとします。

そして、ねじ伏せることが出来たならば、最後は知らんぷりです。

世の中、何を動機にしてこんなにもせわしく回っているのだろうかと考えますと、結局のところ、恐れを動機にして回っていることが見えてきます。

何とかして、恐れを取り除くための力を貯めようとしやかりきになって回っています。

聖書の中の登場人物を見ても、それは一目瞭然です。

人間社会の象徴であり、力の象徴でもあり、人々の目標であり、羨望でもある王たち、エジプトのファラオ、バビロンのネブカドネツァル、そしてヘロデ王皆、恐れを抱いています。

力があるのに恐れます。

だからまた、力を貯めこもうとします。

しかし皮肉なことに、その力は、生まれたての全く無力な赤子にさえも恐れを抱いてしまうような、全くもって、恐れを取り除くための効力はありません。

お金という力も、体力という力も、知識という力も、学歴職歴という力も、経験という力も、年の功という力も、政治という力も、武力という力も、技術という力も、芸術という力も、無力な赤子一人に抱いてしまう恐れに対抗し得るだけの力を持っていませんでした。

さらに、ヘロデ王が滑稽なのは、すべての権力を動員して2歳以下の男の子すべてを殺させたにもかかわらず、彼の標的であった赤ん坊のイエス様一人でさえも殺すことは出来ませんでした。

すべての力を動員して、恐れを取り除こうと大殺戮をして残ったものは、母たちの嘆きと悲鳴と誰にぶつけていいかわからない悲しみだけです。

こんな滑稽なことがありますか？

そしてヘロデは、変わらず恐れに駆られた人生を生きていきます。

Part Two

こんな皮肉な違和感が土台となって、目的となって、世の中回っています。

皮肉な違和感が、牛耳っていると言っても過言ではないかもしれません。

そしてもっと皮肉なのは、違和感を覚えながらも、その違和感に同調し、便乗し、乗つかって回し、回っているということです。

負のスパイラルなんて言う言葉がありますが、正にこれこそ、負のスパイラルの根幹です。

恐れがあるから力を付け、付けた力を持って恐れを取り除こうとしますが、どこまで力を付けても、恐れが取り除かれることはできません。

生命がどこから来たのかという根本的なルーツへの恐れ、その生命がどこに向かっているのかという方向が定まらない恐れ、お金に対する恐れ、時間に対する恐れ、自分の見てくれに対する恐れ、病に対する恐れ、人目に対する恐れ、伝統や習わしに対する恐れ、喪失に対する恐れ、分け合うことへの恐れ、そして究極的には死に対する恐れ。

“恐れに駆られた負のスパイラル”という名が付けられた大きな船に乗つかって世界が回っていますが、知つてか知らずか、そこから降りようとはしません。降り方があるのに、降りようとしません。

でも、イエス様はお生まれになった時から、この船から降りた状態でお生まれになりました。

何の解決にもならなければ、何の動力にもならない、力比べを当てにし依存してお生まれなさったのではなく、あえて何の力もない姿でお生まれなさって、力のはかなさを身をもって示されました。

何の原動力にも、エネルギーにもならない、力比べを動力にしている船から降りる道標として、お生まれなさいました。

だから、イエス様は、ご自身のことを「私が道であり、真理であり、いのちなのです。」と、おっしゃったのです。

イエス様こそ、力に依存する生き方から救われる道なるお方です。

Part Three

私たちキリスト者は、この力比べを動力にしている船から降ろされ、降りた生き方を選び、選び取るように導かれた者たちであるはずなのに、

聖書にある神の民イスラエルも、2000年間の歩みをしてきた教会も、クリスチヤンも、程度の差こそあれ、未だに力比べの中で、その歩みを進めているように思えます。

使徒パウロの書いた手紙のそのすべてに、「頼むから、もう力比べをする歩みはしないで欲しい！」

イエス様が、力比べの奴隸船から贖いだしてくださったのに、また、その奴隸船に乘ろうとし、実際に乗って、躍起になり意地になっているじゃないか！

だから、頼むから、その船から降りた歩みをしていこうではありませんか！」と、語り掛けてきます。

イエス様のなさった業と語った言葉が書き記されている四つの福音書を見て、パウロが言っていることと、全く同じことをおっしゃっています。

おっしゃるだけでなく、力比べの奴隸船から降りた生活の見本となってくださいました。

コリント人への手紙第二 12：10（パウロ）

先日、行われたマナ愛児園のクリスマス会の礼拝メッセージの時読んだ聖書箇所です。

この聖書箇所を呼んだ後、会衆の子どもたちやお父さんお母さんたちに、こんな質問をしました。

「イエス様は、なぜ、赤ん坊としてお生まれなさったんでしょうか？」

皆さんにも同じ質問をいたします。

「イエス様は、なぜ、赤ん坊としてお生まれなさったんでしょうか？」

イエス様が赤ん坊としてお生まれになった理由は、「弱くていいんだよ。強くなる必要はないんだよ。」ということを、お教えになるためです。

そして、私たちが力を付けて強くなるのではなく、唯一無二のお強い三位一体なる神様がいらっしゃることを覚えることこそ、まことの強さであり、安らぎであり、癒しであり、力なんだということをお教えになるためです。

正にパウロの言っていることです。

「キリストのゆえに弱いけれども、強いんです。」

ヘロデの姿からも一目瞭然ですが、強さは人を傷つけるだけです。

人ばかりか、神の造られし被造物をも傷つけます。

私自身も、強くなりたいと筋肉をつけ、頭も強くなりたいと自分なりに勉強もしました。

でも、その強さを付けたいという動機を探っていくと、相手を打ち負かすことが動機だったということを、信仰を与えられて、徐々に徐々に気付かされるようになりました。

強さをもって、分かち合うのならば聖書の教えに適うと思いますが、大概、強くなればなるほど、その力を貯めこみ、分かち合うことを恐れます。

分かち合うと自分が弱くなってしまうかもしれないという恐れに駆られて、力を貯めこみます。

でも皮肉なことに、貯めこめば、貯めこむほど、恐れに駆られます。

だからイエス様は、「受けるより与える方が幸いです。」と仰ったわけです。
使徒パウロも、「イエス様は、受けるより与える方が幸いですと、おっしゃっていました。」と、あらゆる時あらゆる場面で、人々に教えていました。

「受けるより与える方が幸いです。」という御言葉を聞くと、皆さんどう思いますか？

「私は出来ているし、出来るだろうし、出来る。」と思いますか？

それとも、「出来ていないなあ。これからも出来ないかなあ。」と思いますか？

私自身は、「出来ているし、出来るだろうし、出来る。」と思っていました。
でも、実のところ、出来てもいないし、“やっぱり受けのことの方が好きだ”と心底思っている自分を発見することができました。

それは、アメリカでの生活の時です。

以前もお話ししましたように、3年間の留学生活どう計算しても破綻するという恐れに毎日駆られて、夜も眠れず、祈ればお金くださいという祈りしか出て来なかつた時がありましたが、そんな時、宣教師たちの持ち寄りパーティーに招かれました。

そのパーティーで美味しいものは食べたいんだけども、経済的に苦しいからなるべく安上がりの料理を持って行こうと思って、実際に安上がりの料理を持って行きました。

すると、他の宣教師の方々も、みんな苦しい留学生活であるはずなのに、分け合いたい、分かち合いたいという気持ちが伝わってくるような豪華な料理を準備して来られたんです。

その時、どれほど自分が、卑しくて、せこくて、貪欲で、“与えるよりも受けることこそ幸いだ”という信条で生きてきたのか、

また、分かち合うということに恐れを抱いているということを、さまざまと見つけられ、自分の中にある深い闇を見せられるような思いがしました。

なぜ、ヘロデがあんなにも恐れたのか？

それは、分かち合うことに恐れを覚えていたからです。

分かち合うと、自分から力が抜けてしまうと思っていたからです。

分かち合えば、分かち合う以上に与えてくださるという神の恵みを知らなかったからです。

マタイの福音書6：25－34（パワポ）

私たちが良く知っている御言葉です。

「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくても大丈夫だよ。」と、イエス様がおっしゃってくれますが、

結局のところ、「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」と言って、心配すること」は、力に頼る生き方だからこうおっしゃるんです。

イエス様は、何を食べれば強くなれるのか、何を飲めば強くなれるのか、何を身につければ強くなれるのかと言って、唯一の強い方を覚えることを忘れ、自分が強くなることに捕らわれ、恐れに駆られる人生を生きる必要はないと、おっしゃってくださいます。

「恐れに駆られて、どうすれば強くなれるのかを考えるのではなく、恐れとは無縁の神の国と神の義を求めなさい。そこには満足があり、受けるより与える方が幸いだという生き方が伴い、今を感謝し、今を喜べ、力に頼る生き方からの解放があります。」ということです。

Part Four

ヘロデは、強くなることに捕らわれ、恐れに駆られて、無数の幼子たちを殺めてしまいました。

そんなヘロデの強くなることに捕らわれ、面子を保つことに捕らわれ、貯めこむことに捕らわれ、馬鹿にされないことに捕らわれ、自分の正当化に捕らわれ、弱くなることを恐れて、人を傷つけ殺めた姿に、私たちは、私たちの姿を重ねることが出来るでしょうか？

あえて無力なお姿でお生まれなさった救い主イエス様を前にしても、力により頼み、自分のプライドを立て、我を通したヘロデの姿に、私たちは、私たちの姿を見ることが出来るでしょうか？

もっと平たく言いますと、これまで、どれだけ多くの人たちを傷つけながら、ここまで歩んできたのかという自覚が、私たちにあるでしょうか？

私たち罪人、人を傷つけずに生きることは出来ません。
私たちは事実、人を癒やすよりも、遙かに傷つけながら生きてしまっている者たちでありますが、果たしてその自覚があるでしょうか？

旧約聖書のダビデを見ますと、かなり長い間、その自覚が、深い意味で無かつたことが分かります。

ダビデは自他ともに認める優秀な王であり、これまた自他ともに認める敬虔な信仰者だと思っていたところ、夫のいる女性と姦淫の罪を犯しました。

そして、その罪が暴露されるかもしれないという恐れに駆られ、持っている力・権力をすべて動員して、女性の夫であり、ダビデ自身にとっては國のため王のため戦場で命を懸けて戦っている忠実な家来ウリヤを、自分の手は一切汚さ

ず殺害しました。

そして、知らんぷりです。

人を傷つけ殺めたという事実を、力を持ってねじ伏せ、自覚もありません。

そして、詩篇 51 篇です。

預言者ナタンに、人を傷つけながらも、何食わぬ顔して敬虔な信仰者ぶつていることを指摘されたダビデの赤裸々に悔い改めた思いが綴られていますが、その言葉の中に、姦淫の罪と共に犯した相手の女性を攻める言葉は一つも出てきません。

ただひたすらに、神の前にあって、自分を責めます。

どこまで責め立てるかと言いますと、

詩篇 51 : 5 (パワポ)

ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私を身ごもりました。

と言うほどに、ダビデは、自分の罪深さを、自分の内にある深い闇から引きずり出して、むき出しの丸出しにします。

力により頼み、恐れに駆られて、人を傷つけながら生きていることを、この時初めて自覚し、正直に告白しました。

この自覚を覚えられることこそ、クリスマスの恵みの本質です。

力に依り頼まず無力なお姿でお生まれなさった主イエス様の前にあって、私たちが取れる態度姿勢は、ただ一つです。

それは、人を傷つけずには生きられないという正直な告白と自覚です。

夫を、妻を、父を、母を、子供たちを、友人を、同僚を、先輩を、後輩を、傷つけながら生きているという自覚です。

そして、その自覚の上に、主の恵みが現れます。

その自覚の上に、無力なお姿でお生まれなさった主イエス様の強さが迫って来ます。

ヘロデには、残念ながら、この自覚が伴いませんでした。

そして、結局、力があるのに恐れているという皮肉な違和感の中で、生涯を閉じます。

Conclusion

クリスマスを迎えて、ただ賛美して、ただ慰めがあって、ただ心地よさがあつて、ただメルヘンチックな感情に浸るだけならば、それはクリスマスの本質の半

分しか味わっていないことになりかねません。

お寿司に例えますと、ネタは食べずに、シャリだけ食べるようなものです。

ラーメンに例えると、何でしょう？

麺を食べずに、スープだけ飲むことでしょうか？

いや、麺も食べて、スープも飲んで、他の具材全部食べているのに、チャーシューを食べないようなものです。

そんなもったいない出来ません。

だから、無力な赤ん坊のイエス様を前にして、私たちがヘロデのような者であることを正直に自覚でき、告白できる恵みを望まずにはいられません。

なぜならば、その自覚と告白の上に、救いの恵みが、赦しの恵みが新たにされるからです。

力があるのに恐れる人生ではなく、キリストゆえに弱いけれども強い人生を生かされている祝福を、このクリスマスに覚えたいと思います。

お祈りいたします。

祝祷：第二コリント12：10